

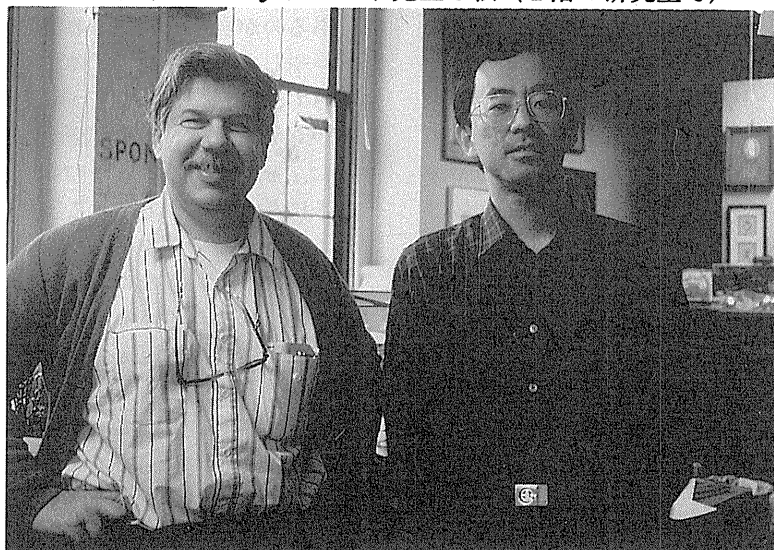
閲覧ニュース

77号

1996. 4



ハーバード大学比較動物学科 (↑)
スティーブン・J・グールド先生と私 (1階の研究室で)



マックス・ウェーバー著 「職業としての学問」

手塚 甫

かなり前のことになるが、朝日新聞に「一冊の本」という欄があって、各方面で活躍している人々が交代で、本をめぐる思い出話を載せていた。一冊の本が、それを読む人とタイミングによっては、いかに深く心を捉え、人を変えて行くものか、本との出遇いの微妙さ、面白さを覚え、毎回それを読むのを楽しみにしていた。しかし、考えてみれば、衝撃を受けるほどの本にめぐり会うことはめったにあることではない。あるとすれば幸運だと言ってよい。たといいい本ではあっても、読む時期が早すぎたために、折角の内容を十分に理解できず、その持つ意味を見落してしまったり、逆に、もう少し若い頃に読んでいたらと悔やみたくなる場合もある。「一冊の本」を読みながら、そういう本との出遇いを持つことの出来た筆者を幸せな人だ、羨ましいとも思った。そして、自分にとっての一冊は何だろうと考えてもみた。「一冊の本」の筆者達とはとても比べようもないが、僕にもかけがえのない本が無いわけではない。マックス・ウェーバーの「職業としての学問」がそれである。

この本に出遇ったのは、確か、大学院も修士課程を了え、博士課程に入って間もない頃であった。普通なら夢や期待で胸がふくらんでいいはずのこの時期、僕は勉強に迷いを持っていた。自分は選んだ道を間違えたのではないか、専門とするのはこの学問でいいのか、抑々、学問の道は自分に適しているのかどうか。考えてみれば、ここまで来てこんなことで迷っているとは情けない話ではある。しかし、大学を受験した頃を振り返ると、自分にはこの道しかないと、がむしゃらに周囲の反対を振り切ってまで思いつめて選んだ道だったはずだ。その熱い想いがいつのまにかすっかり冷え切ってしまっていた。憧れて

入ったはずなのに、大学では重箱の隅をつつくようなことばかりで、自分が求めていることを一向に教えてくれないと、次第に不満を募らせていた。こんな筈ではなかった。こんなことを学ぶためにここに来たのではない、と自分の不勉強を棚に上げて思っていた。そんな時に「職業としての学問」の文字が目に入った。当時は、著者マックス・ウェーバーについては名前を知っている程度で、どれほどの学者なのかと言うこともよく知らなかった。その題名につられて読む気になったのである。

本文は文庫本でも70頁にも充たない薄い本だが、手にとって読み始めると、簡単に読み了えるという訳には行かないとすぐ気付いた。文章はそれほど難しいとは思わないが、斜めに読みとばせるような所など全くない。内容が実に濃いのである。まず、ドイツの大学における研究者の在り方を述べたあと、話は研究者として必要な資質へと移る。第一に挙げているのが自己の専門への情熱と専心である。「いやしくも人間としての自覚のあるものにとって、情熱なしになしうるすべては無価値だからである。」(岩波文庫本23頁)という言葉に、その通りと思いつつも、自分の悩みは、まさにそれが欠けていることにあるのだ。だからどうしたらそのような情熱が持てるようになるのかが聞きたいのだと思いつつ、どこかその点に触れている所はないかと読み急いだ。すると「ある研究の成果が重要であるかどうかは、学問上の手段によっては論証しえない」「それはただ、人々が各自その生活上の究極の立場からその研究の成果がもつ究極の意味を拒否するか、あるいは承認するかによって、解釈されうるだけである」(43~44頁、傍点手塚)という文章にぶつかって、はっとした。この文章を何回も読み返しながら、

僕は長年胸につかえていたものがずっと落ちるのを感じた。まさに目から鱗が落ちたのである。自分は間違えていた、思い違いをしていたことに気付かされたのである。自分は求めるべきではない所を一生懸命探し回って、それが無いと嘆いているだけだったのだ。大学は正しい知識を学ぶ所、事柄を正しく認識するための技術を身につける所、だが、その知識や技術が持つ意味を決めるのは「各自その生活上の究極の立場」つまり研究者本人なのだ。重箱の隅にあるような事柄が問題なのではなく、そのような事柄も揺るがせにできなくなる気持ちが肝心な点なのだ。価値ありと思いその真実を突きとめずにはいられない人にとって、それは最早「重箱の隅にある事柄」ではない。それが「重箱の隅にある事柄」に見えた自分にこそ問題がある、と教えられたのである。つまり、学問には二つの面があるのである。一つは勿論知識の獲得である。しかし存在する知識は無限にある。その中からどの分野の知識を価値ありとするかを決めなければならない。それを決めるのは自分以外に無いのである。さて、自分で決めるとは言うものの、一度定めた道を歩み切るとは、しかし、容易ではない。自分で選んだというものの中味を十分知って決めた訳ではないから、楽しいことばかりが待っているとは限らない。歩みながら思わぬ困難に出会うのも至極当然である。所で困難に遭遇した学生に相談される教師も彼に、最後までその責任を全うしなさい、とはなかなか言いにくい。だがその点について、ウェーバーは、教師は「各人（学生）に対してかれ自身の行為の究極の意味についてみずから責任を負うことを強いることができる」（63～64頁）と言っている。ウェーバーは厳しい人である。しかし、その厳しさは、彼自身が学者に取組む姿勢の中に最もよく示される。彼は勿論、学問を肯定している。だからこそ学問の道を選んだのである。しかし、例えばトルストイは、学問研究はつぎつぎと新しいものを生み出すが、それらはたんに一時的なものばかりで、いかに生

きるかという問題に何も答えないので無意味であると考え。つまり「主知主義（学問研究のこと）を最悪の悪魔として嫌う立場」（65頁）である。これに対してウェーバーは「もし悪魔を片づけてやろうと思うならば、こんにち好んでなされるようにこれを避けてばかりいてはならない。むしろ悪魔の能力と限界を知るために前もってまず悪魔のやり方を底まで見抜いておかななくてはならない」と応じている。うっかりすれば見落してしまいそうな、このさり気ない表現に、僕は、ウェーバーの並々ならぬ学問への覚悟を感じるのである。彼は学問を至高のもの、万能だと思っているわけではない。トルストイの言うような悪魔的なものがあることも認めている。その上で、その中に飛びこもうと言うのである。飛びこんでその「能力と限界」を知り尽くしてやろうというのである。これはただならぬ覚悟だ。彼が学問に志すと決めた時、これだけの覚悟を持っていたのである。学問の下僕になるのではなく、学問を使ってその出来る限りを極め尽してやろうというのである。このウェーバーの学問にかける情熱に比べたら自分はどうか、全くお話にならないではないか。そんな尻びり腰で他に向けて一言でも不平がましいことが言えるのか、ガンと頭に大きく一発やられたように思った。

その後、この本を何度読んだことか。今では部分的だが文章を暗んじて言える所もある。しかし、今でもこの本の中味を汲み尽したとは思えない。読む度に何か新しい発見がある。読むほどに表現や構成が緻密に計算しぬかれていることが分ってくる。

希望に充ちて大学の門をくぐったばかりの新入生の諸君に僕はこの本の一読を勧めたい。予め言うておくが、決して読み易くない。分からなければ何度でも読み返すがよい。が、苦勞して読めば、読んだだけのことはきつと返って来る本である。内容もさることながら、読書の原点は何であるかもきつと体得できるはずである。

（教養図書館長）

「クッキング」

大内 茂実

原稿の締めきりが迫ってきたが、何を書こうか全然頭に浮かんでこない。いまさら本を読んで、その感想文を書こうなんて気もさらさらない。私は平成7年の4月に相模原校舎に転勤してきた。してきたと云うより、させられたと云った方が当たっている。教養部の改組により我が人生に大きく変革があったのは何といっても私一人であろう。この年になって転勤させられるとは夢々思ってもいなかった。私が教養部がなくなるという話を聞いたのは平成3年頃であった、十和田での体育実技は平成6年度で終わるのである。そのことだけははっきりしていた。しかし私自身の身の振り方はどうなるのか、学部長に聞いてもわからないとのことばしか返ってこなかった。その間の3年間は誰に話しても自分のやるせない気持は分かってもらえない、なぜなら私一人だけに関わる問題でとても複雑な心境であった。あのいい知れぬ不安と不快感はことばに云い表わせえないものであった。私は現在単身赴任をしている。まさに又、学生時代が戻ってきた感じでもある。自分の健康管理は自分でしなければならない、そんなことはあたりまえであるが、一番大きな問題は食事の準備であった。しかしこれもやってみると以外と面白い。後期に健康科学の講義を担当することになったが、相模原に来てのひとり生活が大いにこの授業に役だっていると思う。人間として大事なことは、運動すること、栄養をとること、休養をとること、この3つさえ守っていれば人間は健康で居られる。ようしこれを自ら実行してみよう、今体育健康センターに居られる自分がなんて幸せなんだろうと思うようになったのは、そんなことを講義で学生に話してからである。仕事の関係で運動が出来なかった日は、相模原市の総合体育館でウェイトトレーニングをする、

それが日課となってもう半年になろうとしている。運動すれば汗をかき腹も減る、したがってビールもうまいし、どんな料理でもおいしく食べられる。これが私の食事哲学である。ある日のこと、何を食べようか決まらぬままスーパーに買い物に行った。その日はエビの安売りをしていた。そのエビはブラックタイガー、一端は通り過ぎたがどうも気になってもう一度そこを通ったら、エビが「買ってってくれー」としきりに手を振っているではないか…。その時はこのエビをどうして食べようかは何も考えていなかった、ただ手を振っていたので買ったまでのことである。アパートに帰ってまずはビールを一杯飲む。それから何を作って食べようか考える。これが私のやり方である。あーそうだエビを買って来たっけ、どう料理して食べようか? そうだ、いつだったか3分クッキングで見た、エビをせんべい状にすりこぎで叩いて油で焼こう、と思ってエビを見たら、「叩くのはやめてください」、と云うのです。「それじゃどうして食われないの」と聞いたら、「テンプラにしてください」としきりに頼んでいるので予定を変更してテンプラにすることにした。衣を着け油に入れたら、とても喜んでパチパチ油を散らしてはしゃいでいるではないか! こんな体験は初めてのことであったが、それ以来料理の仕方が分からないときはじっと素材を見つめ、「おいこらお前は どうして食われないか」と話しかける、すると素材はちゃーんと答えてくれる。これはすばらしい発見だ、俺はもしかして料理の才能があるのかもしれないと自分で自分を賞賛し、相模原の鉄人(スーパーマン)になるべく、素材を求めてスーパーへ買い物へ行く毎日がこれからずーっと続くのである。(体育)

北里大学図書館共通利用カードの 交付について

図書館を利用するには、「北里大学図書館共通利用カード」が必要です。相模原キャンパス共通のものです。新入生の皆さんには、5月下旬に交付します。薬学部・獣医畜産学部・水産学部・医療衛生学部の1年生は、教養図書館1階のメインカウンターまで取りにきてください。但し、医学部は、医学図書館で、理学部は、理学図書館で、看護学部は、看護学部図書館で交付します。尚、交付までの間は、学生証を使用してください。

「講義用参考文献コーナー」と 「ゼミ指定図書コーナー」

教養図書館では、講義の理解に役立つ参考書、テキスト等を購入して皆さんの利用の便宜をはかっております。図書館2階にそれぞれのコーナーがあります。利用方法は、一般図書と同様です。大いに活用してください。

コピー機利用方法について

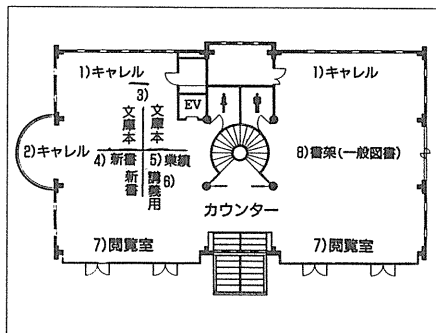
図書館では、複写サービスをプリペイドカード方式により行っております。このカードは、相模原キャンパス内の図書館ならどこでも利用できます。尚、販売は各図書館カウンターで行っております。

〈共通プリペイドカード料金〉

コピー	35枚分	500円
	70枚分	1,000円
	350枚分	5,000円
(1枚あたり約15円です)		

図書館のご案内 2F

皆さん図書館の中をご存知ですか?配置を覚えて上手に図書館を利用してみたいかがですか。今号では、2階をご案内致しましょう。



- 1) キャレル
落ちついた雰囲気の個人席
- 2) ベイウインドウキャレル
相模原キャンパスの風景を眺めながら勉強のできるベイウインドウ席
- 3) 文庫本コーナー
岩波・新潮・角川等の文庫本があります。ハンディで、通学途中の電車・バスでの読書に最適です。
- 4) 新書コーナー
岩波・中公・講談社現代新書が並んでいます。
- 5) 講義用参考文献
担当教員の指定するテキスト、参考図書などが並んでいます。
- 6) 業績
センター教員の業績が並んでいます。
- 7) 閲覧席
自由に利用できる閲覧席が76席あります。
- 8) 書架
新刊本を中心に43,000冊の本が並んでいます。

— 表紙解説に代えて —

「できすぎた成功物語の裏でグールド先生が見つけるもの」

鵜 浦 裕

古生物学者スティーヴン・J・グールドの新しい翻訳が出た。『がんばれカミナリ竜』（廣野喜幸さんほか訳、早川書房、一九九五年一月）だ。こなれた日本語で、グールド先生の翻訳にしてはことのほか読みやすい。本を開くと懐かしさがこみあげてくる。そういえば五年前、ハーバード大学サイエンス・センターの大教室で同じような講義を聞いたような気がする。

この本は生命史や科学史のエピソードにあふれ、そのどれもがおもしろい。そこには勝者の立場から書かれた「できすぎた成功物語には必ずウソがある」というシニカルな姿勢がある。グールド先生はこの懐疑主義を武器に生物どうしの闘い、科学と宗教の対立、科学者どうしの争いをひもとき、歴史上の成功物語の陰に隠された事実をあばく。そのテンポはまさに痛快そのもの、今さらながら先生の洞察力と表現力に圧倒される。

ただし、第八部の創造科学運動に対するレクイエムだけはいただけない。

一九八七年の最高裁判決以来、グールド先生は雑誌、インタビューなどさまざまな機会をとらえて、進化論側の勝利を喧伝してきた。本書でも、「一九八七年六月、最後の創造論州法であったルイジアナ州の授業時間均等化法が……最高裁から無効を言いわたされ、アメリカ史の主要な一幕が閉じたのである」という表現が何度か繰り返されている。この法廷闘争では彼の根回しでノーベル賞学者による請願書が裁判所に出されるなど、彼こそ勝利の立役者だった。

ところが九三年から毎年二、三月アメリカを訪ね歩いてみて、私はグールド先生とちがう見方をしている。大事件こそないが、カリ

フォルニア州だけでも大学教授ケニヨン事件、高校教師ペローザ事件、ウィスタ教育委員会事件など、九〇年代に入っても小競り合いには事欠かない。しかもこれらはさきの最高裁判決が効いているなら起こるはずのない事件ばかりだ。創造論側の人たちは依然として創造論を公立学校の教室へ持ち込もうとしている。進化論側の人たちは司法は自分たちを守ってくれないとさえ感じている。こうした両者にとって、いったい、さきの最高裁判決にはどれくらい意味があるというのか。

ひょっとすると、グールド先生は「創造論 vs 進化論」論争について勝者側から成功物語を書いているのではないだろうか。だとすれば、彼の歴史的懐疑主義という武器をこの成功物語にもつかえるかもしれない。ただし彼自身がそうするはずもなく、彼の歴史を書きかえるだけの力をもったライターもいないのではないかと、私の友人 K・M さん（新聞記者）は言う。確かに今はそうだろう。しかし、五〇年後、一〇〇年後はどうか。第二、第三のグールド先生が出てきて、できすぎた成功物語の陰に葬られた事実をきっと掘りおこしてくれるにちがいない。（一九九五年十二月七日）

（英語）

— 編集後記 —

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。教養図書館では、閲覧ニュースを年2～3回発行しています。エッセイをはじめ、その時々のお知らせなどを掲載しています。図書館利用案内とあわせてご覧下さい。

閲覧ニュース77号

1996.4 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里 1-15-1

発行責任者 手塚 甫

電話 (0427) 78-8005